資料５

本年度の実践委員会と総合教育会議における主な意見

１　ＩＣＴを活用した教育の推進

子供たちの情報活用能力を育み、学力の向上を図るため、具体的にどのようなＩＣＴを活用した取組が考えられるか。
あわせて、それらの取組を進める上で、教員にどのような資質・能力が求められ、どのように伸ばしていけばよいと考えられるか。
また、ＩＣＴの活用と子供たちの心身の健全な育成を両立する上で、どのようなことが求められるか。

○実践委員会（書面開催６月）

(1) ICT 機器を上手に使いこなせる「才」の部分を磨くとともに、今後 ICT 社会が進展するほど、使う側の人間性を高める「徳」を身に付ける教育に力を入れていく必要がある。
(2) 多くの子供たちは生活の中で経験的に身につけたメディアリテラシーのみで現実社会と対峙しているため、学校でのメディアリテラシー教育の充実を最優先に行うべきである。
(3) ICT への依存度が高くなった人が「聞く力」を失いつつあるため、異なる価値観を持つ人との対話を避けるのではなく、ICT 機器を通して異なる価値観を持つ他者との双方向性を実現することがポイントになる。
(4) オンライン交流やオンデマンド授業における問題点など、公立小中学校における課題を改めて整理し、企業や先進的な私立学校、大学等から学ぶ必要がある。
(5) 環境整備を含めた方策を最優先に取り組むとともに、ICT 環境が整っていない家庭へ配慮しながら新しいことに取り組んでいかなければならない。
(6) 県内には掛川西高校や聖光学院高校といった好事例があり、ICT 活用の環境整備と人材育成を一気に押し進める時宜にある。
(7) 高等学校では PC を前提とし、機種の更新を考えると BYOD が、特別支援学校では状況によりタブレット又は PC の貸与が望ましい。
(8) 学校や市町の境を越えて授業教材を共有し、分担して授業素材や教材を作成できるとよい。
(9) 特別支援学校に通う生徒は、放課後等デイサービスで ICT を活用した学習支援の取組等を行うことにより、家庭や学校の負担が少なくなる可能性がある。
(10) オンライン授業は、登校困難な生徒や、発表が苦手な生徒にとって効果的であるため、教室での集団教育を前提とせず、時間と場所に縛られない学校教育へ大転換するチャンスである。
(11) ICT を学校教育でどのように活用していくのかについては、教員の能力が重要となる。
(12) ICT によってより良い学びがもたらされる分野とそうでない分野があるので、全ての教科や分野をひとくくりで考えるのはよくない。特に芸術分野では ICT による授業は大変困難である。

○総合教育会議（７月 29 日）

・人は人が育てるので、対面での教育が大事である。人間性を磨いていくためには、聞く力を高めることが大事であり、人間形成の第一歩である。
・日本の ICT 教育は遅れているので、新型コロナウイルスの影響を契機に５Ｇを導入して新しい教育を実現させる意気込みで、超法規的にスピード感を持って計画的に取り組む必要がある。
・ICT 教育は基礎学力を身に付けさせる手段であり、情操教育との両立は不可欠である。人と人とのコミュニケーション、社会勉強、共同生活、多様性を理解して受け入れる教育、道徳、倫理、体育、スポーツ、芸術等の学校で集って取り組むべき分野の教育と ICT の有効利用をパッケージで捉えて推進することが必要である。
・貧困家庭のサポートが不十分だったことが ICT 導入を一気に進められなかった要因の一つである。ICT 弱者に対し、地域総出できめ細かな支援をしていく時期である。
・コロナ禍で奪われている大人の学びの場である生涯学習をサポートするなど、ICT 導入で派生することもすくい取り、より良い ICT 環境の整備を進めていければよい。
・オンデマンド型の講義で、定評のある講義を全ての学校で活用できるようにするなど、全県レベルで組織的に教材を準備していくことが必要である。
・ICT は、過疎地と都市の学校間で学び合いができるなど空間を移動せずに同時双方向でできるメリットがあるため、活用方法を広げていかないといけない。
・ICT により、日常では見られない自然現象を教材として用意するという使い方ができ、ICT を使った教材を準備することで学習の質を変えていくことができる。
・ICT により、学習者のモニタリングや授業の分析がやりやすくなり、授業の改善につなげていくことができる。その場合、モニタリングや分析ができる人材の育成や、専門部署や専門家の配置が必要になる。
・ICT 教育の推進のためには、教育委員会の中に専門部署を設置し、集中して進める体制を目指してほしい。
・教員志望者をどのように教育し、教員採用の際に ICT の知識や経験をどのように確認するかということも整えていく必要がある。

２　高等学校教育の在り方

新しい時代に対応した「高等学校教育の在り方」

〇実践委員会（書面開催６月）

(1) 「日本一の ICT 環境の整備」、「STEAM 教育」、「ICT、AI を活用したアダプティブラーニング」、「シズオカの教員はティーチャーからコーチ、ファシリテーター、メンターへ」の４つが実現できれば、世界に冠する「教育のシズオカ」実現も夢ではない。

(2) 私立高校は先駆的な取組やチャレンジに特化し、公立高校で汎用的に取り組めることを、県主導でブラッシュアップして広く実現させるという役割分担の観点が必要である。

(3) グローバル人材の育成は、英語教育の徹底が重要となる。オンラインで海外とつながる教育を実践するとよい。

(4) 「主要５教科の学び」と「部活動」に加え、「地域社会と関わり行動する等の活動」を取り入れるべきであり、生徒が五感で感じる教育の実践には、外に開かれた高校教育が不可避である

(5) 県外大学へ進学し、そのまま静岡県に戻ってこない者も多いので、高校段階から県内企業の魅力を伝えていくべきである。

(6) 人、地域、企業の共存が重要になる。将来にわたり、地域との関わりが続くような授業内容を考え、技芸を磨く人につなげていくシステムを具体化する必要がある。

(7) 教員の多忙化の原因の一端が社会そのものの在り方にあるとすれば、地域全体での解決に向けた動きを県が後押しする必要がある。

(8) 「グローバル人材」、「イノベーションを起こす人材」を輩出する教育が必要である。また、「徳」ある人物に触れ自らを省みる機会を高校生に持たせたい。

(9) グローバルな高校を目指すために、芸術分野の教育の充実化、海外からの生徒の受入れについて早急に議論する必要がある。

(10) 「SDGs」を軸とする学びは、世界に通用する「最新の学び」となるので、その学びの機会を県内全ての高校生につくるべきである。

(11) 「演劇のスペシャリストを育てる世界最先端の高校（演劇コース）」ついて、具体的なロードマップを考えたい。

(12) 学びの価値を多様化させ、大学や就職先等に関係なく、自分が社会の中でパイオニアになりうる存在であるということを感じて自信を持てるような取組を行う必要がある。また、学びの動機付けや自己安心感の獲得につながる体験の充実が必要である。

〇総合教育会議（７月 29 日）

・高校生が実社会で活躍する将来のニーズに応えていくためにどういう高校が望ましいかという図式でそれぞれの課題を検討していただきたい。
・全ての高校がアピールできる特色を持てるような体制を目指せたら素晴らしい。
・静岡県に全寮制のインターナショナルスクールがあると、大きな広がりにつながっていく。その際の最大の課題は優れた教員の確保であり、全世界から集めるという発想が必要である。
・ボランティアなど地域貢献活動の実績を学校裁量枠として設定している高校があるように、高校が地域に貢献していく生徒を支援していく考え方が必要になってくる。
・スポーツや身体表現の分野で中学校連携できるとよい。身体表現という形でのスポーツと文化・芸術と共通部分があるので、皆で学び取りながら生徒が自分の進む方向を自主的に決めていけるような環境に高校が変わっていくと面白い。
・高等学校の在り方に関する議論は、際限なく話が広がり実行に至らないので、時間軸を設定し、すぐにやることと５年ぐらい先に目指すことをはっきりさせて議論できればよい。
・演劇科については、従来ある芸術コースで演劇系のことを行っている学校でカリキュラムを組み替えて SPAC の先生を入れる形であれば少しずつ進めそうな気がする。
・特色や特徴は多様性から生まれるので、教育、芸術、文化は、多様性をどう尊重していくかを常に念頭に置いて考えていく必要がある。

〇実践委員会（11 月 25 日）

(1) 生徒は主体的に行動するので、ICT をもっと使うことで、創造力を学ぶ機会を作ってほしい。
(2) 英語をツールとして海外の生徒とディスカッションして、更に新しい取組を英語で発言して連携していけるレベルまで静岡県でも目指していくとよい。
(3) 自ら考えて行動する力を企業側は求めているので、自ら考えてどう組み立ていくのかという力を身に付けられるような教育が小学校から必要である。
(4) いかに高校時代に社会活動を経験できるかが大事であり、単位化したりカリキュラムに入れたりして企業や社会で経験してもらえると見え方が変わってくる。
(5) 生徒に何かきっかけを与えるためのサード・プレイスを地域の中につくり、そこに企業も参画し融合すれば、積極的な生徒と気後れしている生徒にある想いの格差を解消できる。
(6) 魅力あるまちづくりを行うと、そこにある学校や企業も光ってくるので、まちづくりと学校づくりが両輪で必要である。
(7) 生徒が地域の企業や社会と関わりながら様々なことを経験していくことは重要だが、校長も地域を理解するようになると他の教員にも影響を与え、教員も地域を理解すれば、生徒の活動しやすい環境が整う。
(8) 高校生には周りの人々に多様性があるように見えないので、多様な大人や生き方を中高生のうちに様々な形で見てもらえればよい。
(9) 子供たちは、人間らしい大人と出会い、魅力ある大人との出会いによって変わっていく。生徒自身が地域の方と関わって、何がどう変わるかが重要である。また、技術や資格に走りがちだが、どこに行っても通用する力という土台を身に付けることが大事である。
(10) 今までの学校教育の中にも自ら考え行動できる子供は育つ環境はあるので、進学という一大イベントを自分の力で乗り越えるということまで導いて後押しすれば、受験を通して自ら考える力は十分付くはずである。
(11) 学校行事が縮小され、学校が進学学力にあまりにも傾倒しているので、昔からやってきたことをしっかりやっていけば、自ら考え行動することは十分できる。
(12) 小委員会での議論を来年度も進めていただき、熱心な方々のすばらしい御意見を伺い、実践委員会の意見として総合教育会議に反映していく形をつくりたい。

○総合教育会議（１月15日）

・今までの日本の教育が知識偏重型で、同質性を求める教育を行ってきた弊害が浮き彫りになったと改めて感じた。
・10年後、20年後、50年後にどのように世界が変わり、その世界で生き延びていくためにはどのような教育が必要になるのかというように、将来を見通した上で逆算して課題抽出する手法があってもよい。
・生徒と企業のアンケート調査では、教員の考え方や想い、捉え方が見えてこないので、余裕があれば切り込んでほしい。教員がどのような価値観を持っているのかをしっかり把握する必要がある。
・教員には学校で求められている業務が多いので、地域と連携した学びをサポートする役割の人が必要である。県教育委員会としても、提案のあったコーディネート専門人材の配置・育成についてサポートとしていく必要があると強く感じた。
・これからの子供たちには、不確実、不確定な世の中を生き抜く力が大事であり、職業観を通じてどのような生き方をしたいのかをしっかり考える教育が学校で広まっていくことが大事である。
・地域社会に開かれた教育について、教員免許を持っていない民間のスペシャリストが学校で授業を行った際に単位認定はどうなるのかなど、実際に起こる問題について他県で実施される研究に参加するので、問題が見えてきたら報告したい。
・静岡県の高校生は首都圏へ進学した後、いろいろな事情で地元に戻ってこない。実家を離れて一人で武者修行することで失敗や勉強を通して人間形成ができていくので、地元に無理やり残るようにするのではなく、若者が静岡県に戻って来てくれる仕組みをつくることが大事である。
・静岡県の優秀な学生に対して、卒業後に地元の企業へ就職する代わりに奨学金の返済をその企業が支援することを約束する予約のような形にすると、学生はその企業に入るために勉強にも力が入り、企業にとってもプラスになるので、静岡方式としてトライしてもよい。
・コーディネーターをどこで探し、どのように育成していくかということが集中して考えていかなければならない課題の一つである。企業と一緒に高校生を育てる重要性が指摘されているが、企業を退職して後進の育成に関心のある人を探してみるのもよい。
・今の高校はいろいろな取組を熱心に行っているが、良い実践例が世の中に広く周知される機会が少ないので、既に取り組んでいる良い実践例を一目で分かるように紹介していくとよい。
・学校と地域を一人でつなぐことは難しいので、地域の側から発掘したコーディネーターと学校のことをよく知っているコーディネーターが二人三脚でつないでいく形ができるとよい。
・高校と連携した企業の社員がとても生き生きとしているという報告があり、連携の枠組みの中で企業側にもポジティブな影響がある。高校と企業の連携によるポジティブな成果を企業側から経済団体の集まりの中で発表する機会があると、企業にも高校と連携してみようという視点ができてくる。

３　誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

いじめや不登校等の問題の解決に向け、どのようなことが求められるか。
また、経済的・社会的な事情にかかわらず、全ての子供が等しく教育を受けられるようにするため、具体的にどのような取組が考えられるか。
特別な支援を必要とする子供たちの将来の自立と社会参加を目指し、一人一人のニーズに対応した教育環境や教育内容の充実を図るとともに、個々の可能性を最大限に伸ばすため、具体的にどのような取組が考えられるか。

○実践委員会（９月 24 日）

(1) 情報を集積して分析できる社会になってきたので、アンケートを重視して活用することでいじめを未然に防ぐことにチャレンジしていけばよい。
(2) ICT を活用して共有のコンテンツを作成する際に横のネットワークを構築するなど、貧困問題やいじめ・不登校問題と ICT 教育を一体で進めていくことができる。
(3) 学校に行かなくても学べるホームスクールは、いじめや不登校の問題を抱える子供たちにとって救いになる可能性もあるが、親の在宅を前提とするなど各家庭だけの負担とならないよう、地域で見守っていくことが必要である。
(4) 地域コミュニティが強化されることで、地域の子供たちへの目配りが細かくなり、落ちこぼれを防いで地域の教育レベルが上がっていく。
(5) リーダーシップ育成の観点から、生徒会やクラスなど生徒同士で解決することが大事であり、いじめがあったときに同世代が助け合い、それを教員等がフォローしていくということを考えるとよい。
(6) 課題を大量に出す管理型の進学校では、生徒が疲弊して不登校につながっているため、こうした進学校の状況を見直し、自分の課題は自分でプログラムして選択できる自主自学のシステムにしてほしい。
(7) 引きこもりやいじめにも理由があるので、相互理解できる時間があるとよい。失敗しても大丈夫だと言ってあげられる場所があれば、子供は救われる。
(8) 「才徳兼備」の「才」だけを育てても駄目である。「才」の部分の活動の中で「徳」も育ち、「徳」があることで「才」が更に伸びていくので、「才」と「徳」の両輪で取り組んでいくことが大事である。
(9) いじめの防止の観点では、子供の頃からハラスメント教育を行う必要がある。ジェンダー、ICT リテラシー、ダイバーシティの問題など、様々なケーススタディによるハラスメント教育を学校現場で行えるとよい。
(10) 特別な支援を必要とする子供たちに対しては、アダプティブラーニング（個別最適化学習）として様々なコンテンツが既に存在している。静岡県が先駆的にアダプティブラーニングに取り組んでほしい。
(11) 学校の勉強が物足りないと感じている子供たちと、追い付いて行けないと感じている子供たちがいる。両方の子供たちにどのような光を当てたら本当の意味での才能を伸ばしていけるのかを今後考えていきたい。

〇総合教育会議（10 月 22 日）

・私塾で黙想を実践しており、子供たちに落ち着きが出てくるという効果を体験している。黙想の時間が学校教育の中に取り入れられている本県の教育は素晴らしい。
・いじめ、不登校、貧困等の問題は、掛け算のように複雑に絡み合っており、支援する方々とつなぐ教員の負担が増えている。
・差別的な発言や同調圧力を子供たちに感じさせるような発言をしてしまう大人の意識改革が必要である。また、生徒自身で校則を考えて実践することでいじめ等を減らした他県の事例があるので、県内の学校でも生徒たちに学校の在り方を考えさせる取組を試すとよい。
・スポーツがサードプレイスとしての逃げ場という形でのサポートができることを実感している。
・教育委員会の取組のバリエーションは増えたが、十分行き渡るボリュームが用意できていない。いろいろな試みが進んできているので、どのような効果があるのかをきちんと見極めてボリュームを増やしていく努力が必要である。
・現代の重要なキーワードは「多様性」である。様々な場面で多様性を意識し尊重する社会をつくっていくことが大事である。ICT を使った教育も多様性であり、学び方に関しても多様性を認めていくシステムが必要である。
・「職業に対する誇りを持つ」ことで満足感や夢と希望を持ち、社会を乗り切っていくことができる。
・障害のある生徒と障害のない生徒とをできるだけ交流させることが大切である。学校のカリキュラムに福祉の時間をつくるなど、お互いに助け合うようなことができれば特別な支援を必要とする子供たちへの教育の充実と地域全体で成長を支える活動を促進できる。
・中学校までは少人数教育ができるようになったが、少人数教育は、教員の負担を軽減し、教育の質を高めるので、県内の公立高校でも決められた基準に対して疑問を持つべきであり、高校に広げていくことも検討課題である。
・画一化には一面では良い面もあるが、社会や文化、教育分野では逆効果となる。国や地域、そこに生活する人々の状況を踏まえて自由に組織化するべきである。
・通常学級にいる発達障害のある児童生徒に対するケアや、障害のない生徒の保護者等の取り巻く人たちの理解が今後の課題となる。
・肢体不自由な方が「OriHime」というロボットを使ってカフェを開くなどの活動をしている事例があるので、特別支援学校の中にも ICT が広まっていくとよい。
・新型コロナウイルス感染症による経済への影響は今後の方が大きく出て、貧困等により就学を諦めざるを得ない子供たちが出てくることを危惧している。こうしたことが起きてこないかモニターする仕組みを作り、備えておく必要がある。就職の問題も同様に、状況をきちんと把握するためにアンテナを高くしておく必要がある。

４　未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進

一人一人の能力、適性、成長に応じた多様な学習機会を提供し、個々の能力を更に伸ばしていくために、具体的にどのような取組が考えられるか。
グローバル化が進展する社会において、世界に貢献できる人材を育成するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

○実践委員会（11 月 25 日）

(1) 地域の困りごとについて、結果は出なくても取り組むところまでは総合学習でやってほしい。自分の進路や受験に関わらなくとも、変革と利他をポイントにSDGs を総合学習で進めていくとよい。
(2) 才能を発揮する人材とグローバル人材の育成については、静岡県内の人たちだけで考えていても難しい。失敗してもよいので教育行政に関わる人のマインドセットを変えなければ、幾ら静岡に関わる人たちが話し合いをしていても縮小していくような政策しか出てこない。
(3) 全県下平等に実施すると大変なお金と時間がかかるので、例えばトヨタによる裾野の未来都市の建設などに乗るのも一つのアイデアである。
(4) グルーバル人材の育成において、オンラインではできない生身の付き合いは大事だが、新型コロナウイルス感染症の影響により、海外に生徒を送ることができないので、海外から優秀な高校生を農業高校などで受入れてほしい。
(5) 海外から勉強するために来てもらうためには、欧米ばかりに目を向けずに、身近なアジアからすばらしい先生をたくさん呼べるよう環境整備をすると、本当の意味でのグローバル人材が育つ。
(6) 小学校から、流暢な英語でなくても互いに通じ合えるような英語を毎週使うことが大事である。英語に触れていくことが優秀な才能を伸ばすことにつながるため、予算や仕組みの面で具体化をお願いしたい。
(7) 世界で活躍するために子供たちを育てるのではなく、世界に貢献できる人材を育てていくという考え方にしなければ、優秀な人材はとにかく外に行きなさいということになり、遠くに行くことが目的で何が最終的な人生のゴールなのか見失ってしまう。
(8) 一人一人の才能は違っており、その才能を伸ばす時にどれだけの教員がその生徒に対して目を向けているかということが、その生徒の才能をうまく汲み上げるための大事な仕組みだが、教員の多忙化により手が回っていない現状では、一人でも多くの生徒に目を向けられるような状況をどう作るかが非常に大事である。
(9) 本当の意味でのグローバル人材を育てていくのならば、授業を完全に英語で行うことが重要である。

○総合教育会議（１月 15 日）

・教える側の教員が価値観を変えなければならない。これまでの教育は横並びであり、均一性や同一性を求める教育だったので、そうした観点をリセットして出る杭をいかに多く作るかという教育に変えていかなければならない。
・芸術であってもスポーツであっても、とにかく多岐にわたって本物に触れる機会を多く生徒たちに与える工夫が必要である。
・情報機器や人工知能を駆使して基礎教育の効率化を徹底的に追求していくことで、教員の時間的・物理的・精神的な余裕が生み出されるので、その生み出された時間を生徒たちの個々の力を伸ばす教育に当てる工夫が必要である。
・学級、学年、学科、学校の種類、地域、公立・私立等の垣根を取り払い、類似する才能や同じような分野への興味を持つ生徒たち同士を幅広く交流させ、刺激を与え合うことで才能を伸ばしていくということが考えられる。
・特技や才能、興味を持っている生徒たちが、教えられるのではなく自ら考えて学ぶ時間を学校教育の中に単位として組み込んでいくような工夫ができれば、生徒たちを伸ばす大きなきっかけになる。
・多様な人材の育成の観点からは、学力が高いことで参加できるプログラム以外にもっと多様なプログラムを推進していく必要がある。
・自分で考えて自分で問題解決を図る子供を育てることが大事であり、そのためには何でも好奇心を持って実行に移すことで、自分で創り出していける力を持ってもらうしかない。自ら問題を見付けて解決する力を身に付けた若者が多く出てくることを期待している。
・高校が学校開放の拠点になっていけば面白い。健康増進で自分の体に興味を持った年配者向けの施設としてサポートしたいという企業が多い。教員ではない大人が学び続けている姿勢を見るのは子供たちにも良い刺激になるので、地域に対する学校開放の可能性が広がっていく。
・先進的な試みを真似し合う環境づくりが必要であり、そのために事例をきちんと紹介するようにすることが必要である。
・グローバル人材とは、海外との接点ということだけではなく、多様性を理解し受け入れることができる人材である。
・英語圏以外の言語や暮らしに触れる機会を持つことは大事であり、静岡県は、地域の定住外国人や留学生といった人材を生かしていける。
・グローバル化は、ただ海外へ広がっていくという意味ではなく、根っこを持っていないといけない。自分の座標軸を持つため、静岡県民が共通して認識できるものを強く打ち出していく必要がある。
・全寮制のインターナショナルスクールであってもバカロレアであっても、多様性の勉強の場としての高校を積極的につくっていくべきであり、そのためには知事部局と教育委員会が連携し補完し合いながら新しい高校の構想が実現していくことを望む。